

## 別紙 4

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目  
氏 名青年期後期・成人期前期における自己の発達  
—Kegan の構造発達理論に基づいて—

齋藤 信

## 論 文 内 容 の 要 旨

本研究では、青年期後期から成人期前期における自己の発達を、Robert Kegan 氏の構造発達理論に基づいて捉えることを試みている。Kegan の理論は、認知構造発達を基盤とした自己の発達理論であり、主体（現実・経験の意味生成の根幹にあり、客観的に思考することができない領域）と客体（自己が心的距離を取ることができ、客観的に思考できる領域）の均衡で、自己の発達を説明している。研究調査（本調査）では、構造発達段階の測度である主体-客体面接（SOI）を、青年期後期（大学生）・成人期前期 40 名ずつ合計 80 名に実施した。その結果、日本におけるこの時期の人々の自己の発達が、Kegan の第 3 段階から第 4 段階への発達として捉えることができることが明らかになった。さらに同時に実施した EPSI との関連から、第 3 段階から第 4 段階の自己の発達と、Erikson のアイデンティティ、勤勉性の心理社会的危機を解決している感覚が関連することが明らかになった。加えて本研究では、SOI で語られたテーマ領域を検討し、青年期後期から成人期前期にかけて、自己の発達に影響を及ぼす文脈の領域が、学生生活に関わるものから、成人期に関わる職業生活・家庭生活に関わるものへと変化していくことを示した。これらの結果から、本研究では、青年期後期・成人期前期における自己の発達の要因と、そこから示唆される、この時期の人々の教育・支援のあり方について、認知構造の発達、アイデンティティ形成を促進する観点を中心に、考察を行っている。

本研究は、3 部 8 章の構成となっており、各章の概要は、以下の通りである。

第 I 部 自己の発達に関わる研究の展望と Kegan の構造発達理論

第 I 部は、3 つの章から成り、自己の発達に関わるこれまでの研究の展望を行っている。

## 第1章 自己の発達に関わる研究の展望

自己の発達に関わる研究の動向を概観し、「青年期後期の自己形成、アイデンティティ形成の研究では、発達メカニズムに関心が寄せられていること」「発達メカニズムの根底には、認知構造の発達がある可能性が指摘されていること」について論じている。

## 第2章 Kegan の構造発達理論

Kegan の構造発達理論、測度である SOI、理論に関わる研究動向について論じている。

## 第3章 本研究の目的

本研究全体の目的と意義、構成、方法について論じている。

## 第II部 Kegan の構造発達理論に基づく青年期後期・成人期前期における自己の発達

第II部は、4つの章から成り、Kegan の構造発達理論に基づいた、自己の発達に関わる実証的研究について論じている。

### 第4章-研究I：SOI 日本語版の検討—Kegan の構造発達理論に基づいて—

第4章-研究Iでは、SOIの日本語版を作成し、「実施、評定が可能か。それらの過程でどのような課題があるか」を確認することを目的としている。青年期・成人期の人々延べ18名にSOIを実施し、SOIの標準的手法が、日本において、概ね実施、評定が可能であり、それらは学習可能な手法であることを示している。そして、これらの過程における、課題や困難さについて検証している。

### 第5章-研究II：青年期後期における自己の発達—Kegan の構造発達理論に基づいて—

第5章-研究IIでは、日本の青年期後期における自己の発達の特徴を、Kegan の構造発達理論に基づいて検証することを目的としている。大学生40名にSOIを実施し、日本の青年期後期におけるKeganの構造発達段階、および面接で語られたテーマ領域について示している。そして、これらを基に「Keganの構造発達段階と学年の関連」「海外の結果との比較」「大学生を対象とした面接で語られたテーマ領域の特徴」「複数の異なるテーマ領域を包括して参加者の構造発達段階を

決定すること」について検証している。

#### 第6章-研究Ⅲ：Keganの構造発達理論に基づく青年期後期・成人期前期における自己の発達—Eriksonの心理社会的危機との関連—

第6章-研究Ⅲでは、日本の青年期後期から成人期前期における自己の発達の特徴を、Keganの構造発達理論に基づいて検証することを第1の目的としている。そして、青年期後期から成人期前期におけるKeganの構造発達段階と、Eriksonの心理社会的危機が解決されている感覚との関連について検証することを第2の目的としている。青年期後期および成人期前期の人々各40名、合計80名に、SOIおよびEPSIを実施し、これらの時期におけるKeganの構造発達段階とEriksonの心理社会的危機が解決されている感覚について明らかにしている。そして、これらを基に、「青年期後期から成人期前期におけるKeganの構造発達」「この時期におけるKeganの構造発達とEriksonの心理社会的危機が解決されている感覚の関連」について検証している。

#### 第7章-研究Ⅳ：成人期前期の自己の発達に影響を及ぼす文脈の領域

##### —SOIで語られたテーマ領域から—

第7章-研究Ⅳでは、成人期前期の人々にSOIを実施し、面接で語られたテーマを領域別に分類することで、成人期前期の人々の自己の発達に影響を及ぼす要因となっている文脈について検討することを目的としている。成人期前期の人々40名にSOIを実施し、SOIで語られたテーマ領域の分類について示している。そしてこれらを基に、「成人期前期と青年期後期（大学生）の人々により、語られたSOIのテーマ領域の比較」「成人期前期における職業生活、家庭生活に関するテーマの特徴」について検証している。

### 第Ⅲ部 本研究の総括と今後の展開

第Ⅲ部は、第8章の総合考察のみから成る。

#### 第8章 総合考察

第8章は、以下の3点について述べている。第1に、研究Ⅰ，研究Ⅱ，研究Ⅲ，研究Ⅳの実証的研究から得られた結果のまとめをし、得られた研究知見についての考察を行っている。第2に、本研究から明らかになった課題と今後の研究の方向性について論じている。そして、第3に、Keganの理論が有する可能性について、論じている。